



Title	アクン技芸の音楽構造の分析：新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物（Oral Narrative）
Author(s)	ウメトバエワ, カリマン
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 94-95
Issue Date	2019-07-31
DOI	10.14943/jacas.15.94
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88374
Type	article
File Information	JB015_008umetbaeva.pdf



[Instructions for use](#)

アクン技芸の音楽構造の分析

— 新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物 (Oral Narrative) —

ウメトバエワ・カリマン

кыргыз казак бир тууган クルグズ人とカザフ人は兄弟
қазақта әу дейметін қазақ жоқ カザフ人に歌えないものはいない
 (クルグズとカザフの言い伝えより)

アクン(akhyn)とは、楽器を弾きながら即興で歌い話芸を行う芸能者を意味する。ソ連成立以前のアクンは、単に聴衆を楽しませるだけでなく、庶民の意見を代弁し、社会体制を風刺する存在でもあった。2人以上のアクンが即興の歌で競い合うことをアイトウシユ(aitysh)と呼び、アクンの力がかもっとも現れる場である。かつては旧ソ連のさまざまな国に存在していたと言われているアクンは、現在クルグズとカザフスタンにしか残っていない。その技芸は今日でも口頭伝承であるため、一見その伝統が続いているように思われるが、その実態はソ連成立前後で大きく異なると考えられる。例えばアクンも使用する楽器や伝統音楽については、ソ連の一員となった両国に西洋文化が流入し、楽譜が導入され、音楽機関が誕生し、楽器の改良が行われたことなどにより、両国の音楽というものがそれまでのものとは大きく変化したことがわかっている。この、音楽におこったような変化がアクン技芸にもおこったと仮定し、その伝承方法・上演形態・レパートリーの変化、旋律の構造などについて分析するのが報告者の現在の研究である。

今回は報告者が2015年から2018年にかけてカザフスタンとクルグズで収集した資料を元に、アクン技芸の現状を明らかにし、音楽的側面から分析を試みたことを報告する。クルグズ共和国では、2001年にビシュケクで設立された若手のアクンを育成するための唯一の学校、「アイトウシユ」学校が調査の中心となった。カザフスタンでは、カザフスタン国立芸術大学⁽¹⁾ 伝統音楽芸術学科⁽²⁾の伝統歌学科⁽³⁾、カザフスタン国立芸術大学⁽⁴⁾に属するコルク・

(1) Қазақский национальный университет искусств (ロ)、Қазақ ұлттық өнер университеті (カ)。

(2) факультет традиционного музыкального искусства (ロ)、дәстүрлі музыкалық өнер факультеті (カ)。

(3) кафедра традиционного пения (ロ)、дәстүрлі ән айту кафедрасы (カ)。

(4) Қазақский национальный университет искусств (ロ)、Қазақ ұлттық өнер университеті (カ)。

アタ科学研究所⁽⁵⁾、グミリョフ・ユーラシア国立大学⁽⁶⁾のカザフ文学学科で調査を行った。また、報告者は2016年の12月3日と4日の2日間に渡り、カザフスタンのアルマティで行われたアイトゥシュ「アルトゥン・ドンブラ」(Altyn dombyra)を見学することができ、その録画・録音がカザフのアクン技芸を音楽的側面から分析するための主な資料となった。アクン技芸の音楽的構造、語り物(oral narrative)としての分析を行うため、2002年の『日本の語り物——口頭性・構造・意義』で取り上げられている平家物語、能、浄瑠璃、浪花節、座頭琵琶、ゴゼ歌の音楽構造を見通すモデルや分析方法を参考にした。

この現地調査で、アクンが使用しているメロディーは数多くあることがわかった。メロディーのことは、クルグズ語ではオボン(обон)と呼ばれている。オボンは7～9の音節からなり、この構造はクルグズの民族叙事詩「マナス」からの影響を受けていることが明らかとなった。カザフスタンではメロディーのことは、マハム(махам)、あるいはサルン(сарын)と呼ばれており、詩の一行は11～13音節から成る。クルグズの場合とは異なり、エポスのジル(жыр)、歌のエン(ән)が構造の元となっているということもわかってきた。

今回の報告のまとめでは両国のアクン技芸の現状を比較し、どちらの国でも若いアクンの育成が行われているものの、その支援のあり方が異なっていることも示した。カザフスタンでは若手のアクンの数も多く、その実力を測るアイトゥシュが全土で開催されている。また、クルグズでは「アイトゥシュ」学校が1つしかないのに対し、カザフスタンでは高等教育までアクンが育成されている。カザフスタンではナザルバエフ前大統領が率いていた政権与党「ヌル・オタン」(Нұр Отан)党が援助に関わっており、国レベルでアクン技芸が保護されている。一方、クルグズでは、政府は文化政策に消極的で、法律では国家予算の3%は文化に使われるべきと定められているが、実際に使われている予算は1%未満ということも今回の調査で明らかになった。そして、アクン技芸を含む文化およびその事業を支えているのはクルグズ政府ではなく、さまざまな協会や基金である。また、アクン技芸を支える固定のスポンサーはおらず、カザフスタンと比較すると経済的支援が少ない。このような経済的支援に差が生じている現状が、両国のアクン技芸の復興における差につながっている。このことが彼らの音楽にどのように影響を与えるのか、今後も注視していきたい。

(東京藝術大学)

(5) Научно-исследовательский институт им. Коркыт-ата (カ)、Қоркыт Ата атындағы ғылыми-зерттеу институты (カ)。

(6) Евразийский национальный университет им. Л.Н. Гумилёва (カ)。